

2 「学校楽しいーと」の活用による児童生徒理解

不登校の未然防止には、児童生徒理解が重要である。平成23・24年度の「自己指導能力の育成に向けた生徒指導の在り方に関する研究^{*3)}」では、不登校やいじめ、暴力行為等の生徒指導上の諸問題の未然防止を図るために、集団や個人に対し、どのように課題等を見付け出し、どのように働き掛けたらよいかなど、生徒指導の在り方についてまとめ、一人一人の児童生徒の自己変容、自己成長を促すためには、個々に応じた働き掛けが必要であり、児童生徒理解が不可欠であることを再認識した。「学校楽しいーと」は、児童生徒の学校における適応感を測る質問紙として、当教育センターにおいて平成23年度までに開発されたものである。適応感の観点としては、「友達との関係」、「教師との関係」、「学習意欲」、「自己肯定感」、「心身の状態」、「学級集団における適応感」を設定し、客観的に児童生徒の状況を捉えられるようにしている。児童生徒が自分のことをどのように思っているのか、学級には気軽に話せる友達がいると思っているのか、学級への所属感はどうであるのかなど、児童生徒を理解することが、新たな不登校を生まない関わりにつながっていくものと考えられる。

第2章 教員や児童生徒に関する実態調査の結果及び考察

1 実態調査の概要

(1) 調査の目的

教員を対象に不登校対応に関する課題や効果的な取組について、その実態を把握するとともに、児童生徒を対象として、学校生活における満足感や学校への回避感情など、学校生活に関する実態を把握し、調査研究に係る基礎データとする。

(2) 調査の対象

ア 教員への調査：公立小学校30校（694人）、公立中学校16校（346人）、公立高等学校7校（269人）、合計53校、1,309人（県下公立小学校、公立中学校、公立高等学校の約1割に当たる教員について、地域、学校規模を考慮して偏りがないように抽出した。）

イ 児童生徒への調査：公立小学校55校（第5学年児童3,085人）、公立中学校30校（第2学年生徒2,651人）、公立高等学校14校（第2学年生徒2,836人）、合計99校、8,572人（県下公立小学校第5学年児童、公立中学校第2学年生徒、公立高等学校第2学年生徒の約2割に当たる学校について、地域、学校規模を考慮して偏りがないように抽出した。）

(3) 調査の内容

ア 教員用調査：「不登校対応に関する調査」26問

不登校対応の課題、不登校予防に効果的な取組、初期対応、長期化している不登校児童生徒への対応

イ 児童生徒用調査：「学校生活に関する調査」11問

学校の満足度、学校の満足感の理由、自己有用感、学級への所属感、休み時間の過ごし方、学校回避感情、学校回避行動、休まないための対応、自己肯定感、相談相手

(4) 調査の時期、方法

ア 調査期間：平成25年8月から10月

イ 方法：4件法の選択方式による質問紙調査法

*3) 「自己指導能力の育成に向けた生徒指導の在り方に関する研究」：研究紀要第117号鹿児島県総合教育センター（平成25年3月）

2 実態調査の結果及び考察

(1) 教員の不登校対応に関する実態調査

ア 不登校対応の課題

Q 1 あなたが、不登校対応で困っていること、課題だと考えることはどんなことですか。

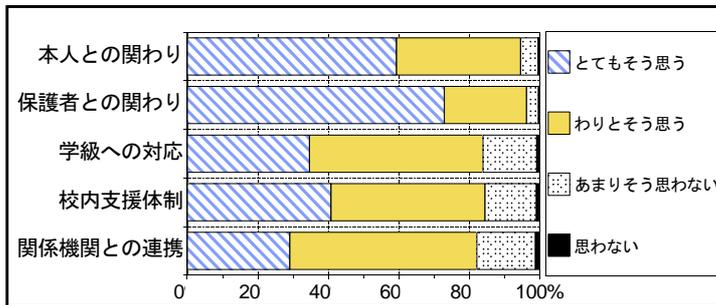


図2 不登校対応の課題

<考察>

不登校になっている児童生徒の「保護者との関わり」について、72.9%の教員が特に課題であると捉えている。不登校対応では、家庭訪問や電話でのやりとりを含めた保護者との関わりに難しさを感じていることが分かる。また、83%以上の教員が、「本人との関わり」や「校内支援体制づくり」、「関係機関との連携」に課題があると捉えている。

イ 不登校予防の取組

Q 2 児童生徒が、不登校にならないために効果がある取組は何だと思いますか。

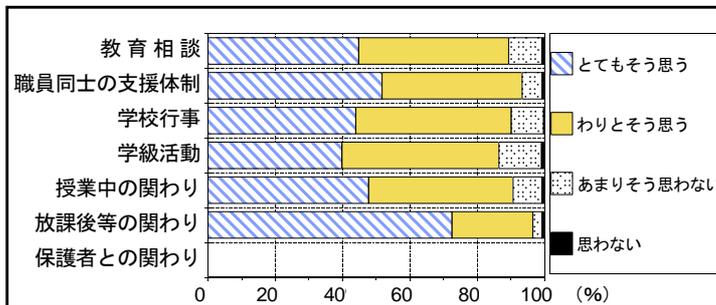


図3 不登校にならないための取組

<考察>

不登校にならないための効果的な取組として、「保護者との関わり」を「とともそう思う」と72.6%の教員が捉えている。一方、13.6%の教員が「授業中の関わり」について、「あまりそう思わない・思わない」と捉えている面がある。職員同士の支援体制や学校行事、学級活動、放課後等の関わりと比較しても低いことが分かる。

ウ 初期対応

Q 3 児童生徒が休み始めた時（2～3日）、どのような対応をしていますか。

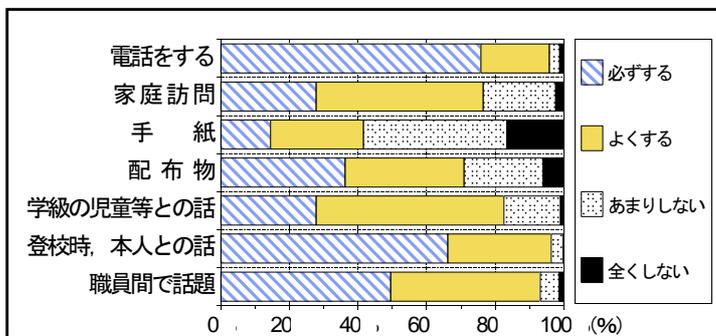


図4 初期対応

<考察>

児童生徒が休み始めた時、「電話を必ずする」が教員が75.9%いることが分かる。また、家庭訪問を「必ずする」、「よくする」教員が76.5%いる。休んでいた児童生徒が登校した際に「本人と必ず話をする」や、「教員間で本人のことを必ず話題にする」割合は、約50%～66%にのぼり、休み始めた2日～3日で、教員が具体的な対応をしていることがうかがえる。

エ 長期化している児童生徒への対応

Q 4 60日以上欠席している児童生徒には、どのように対応していますか。

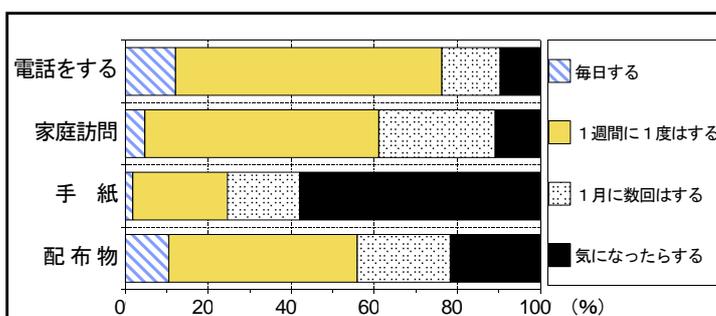


図5 長期化している児童生徒への対応(1)

<考察>

本質問では、これまで60日以上欠席をした児童生徒に関わった経験のある教員のみが回答するようになっている。それによると、約61%～約76%の教員が「電話」や「家庭訪問」を「毎日」や「1週間に1度はする」と回答している。一方で、「気になったらする」と回答している割合が約9%～58%おり、関わり方が一定していない状況がうかがえる。

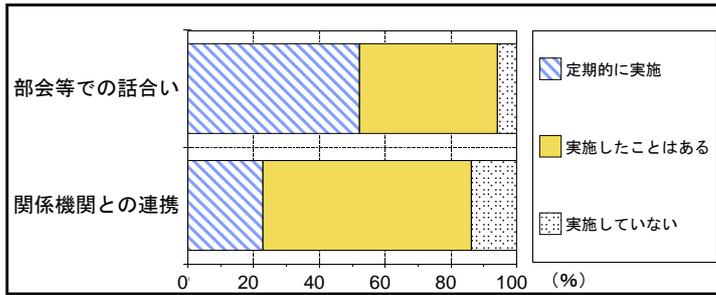


図6 長期化している児童生徒への対応(2)

<考察>

部会等での話し合いは、約48%が「定期的には実施していない」と回答しており、関係機関との連携では、約77%が「定期的な対応を実施していない」ことが分かる。このことから、児童生徒が2日～3日休み始めた際に「職員間で必ず話題にする」教員が約50%いた(図4参照)ことに対し、長期欠席している児童生徒のことで部会等での話し合いが定期的には実施されていないなど対応の二極化がうかがえる。

(2) 児童生徒の学校生活に関する実態調査

ア 学校生活への満足

Q1 学校での生活は楽しいですか。

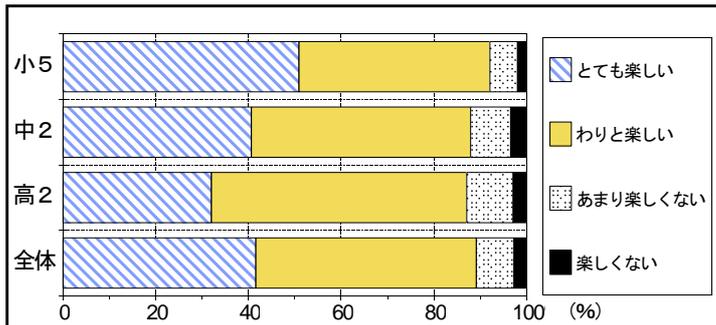


図7 学校生活への満足感

<考察>

学校での生活が「とても楽しい・わりと楽しい」と捉えている児童生徒は全体で約89%おり、多くの児童生徒が学校生活に満足していることがうかがえる。一方で、全体で約11%の児童生徒が学校生活に対して「あまり楽しくない・楽しくない」と捉えており、不登校の未然防止の面からも、個々の状況を含めて留意していく必要がある。

イ 学校生活への満足感の理由

Q2 「とても楽しい」、「わりと楽しい」と答えた人は、その理由は何ですか。二つ以内で選んでください。

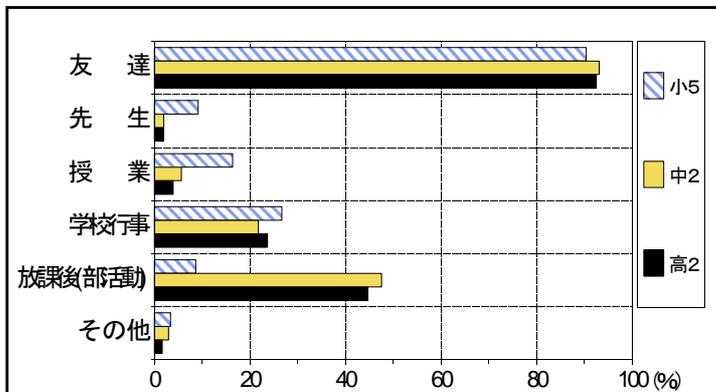


図8 学校生活への満足感の理由

<考察>

学校満足感の理由として「友達の存在」を選択している割合が各校種90%を超えている。学校における友人関係が重要な位置を示していることが分かる。中・高校生は、「部活動を含む放課後の活動」を選択している割合も高い。「学校行事」に対する関心も高いが、中・高校生は、「授業」や「先生」に対する満足感が低いことが分かる。

学校生活への満足感の理由を二つ以内と限定したことの影響も考えられる。

ウ 学級での自己存在感

Q3 今の学級でよいところを認めてもらったり、ほめてもらったりしたことはありますか。

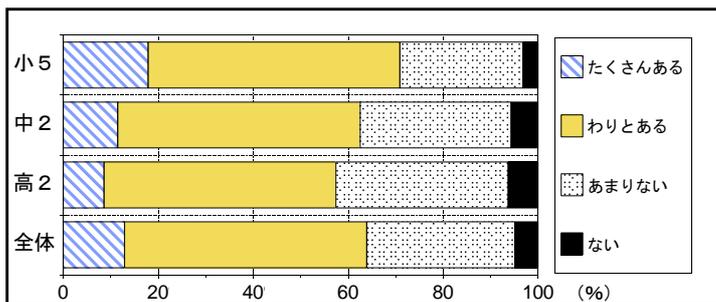


図9 学級での自己存在感

<考察>

70.9%の小学生、62.5%の中学生、57.4%の高校生が「今の学級でよいところを認めてもらったり、ほめてもらったり」していると捉えている。

一方、「よいところを認めてもらったことはない」と回答している児童生徒が3.2%～6.3%おり、学級での自己存在感を与える働き掛けの必要性がうかがえる。

エ 学級への所属感

Q 4 今の学級の一員でよかったですか。

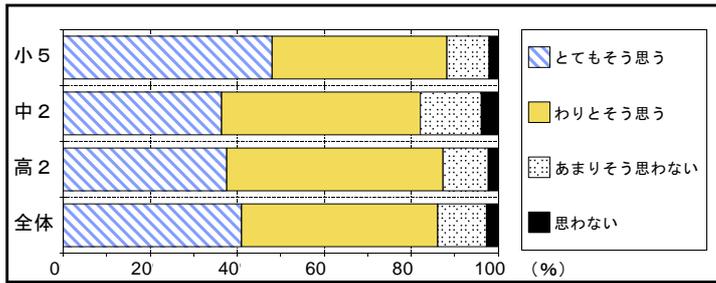


図10 学級への所属感

<考察>

「今の学級の一員でよかったです」と捉えている児童生徒は、約86%いる。校種間の差は、あまり見られず、多くの児童生徒が学級への所属感があることが分かる。

一方で、所属感をあまりもっていない児童生徒も11.8%~17.9%おり、新たな不登校にさせないためにも、該当する児童生徒への働き掛けに留意が必要である。

オ 休み時間の過ごし方

Q 5 休み時間はどのように過ごしていますか。

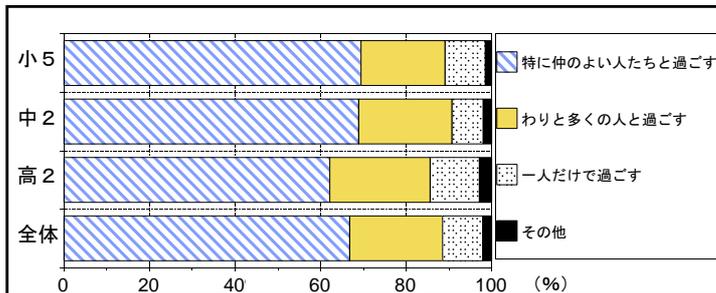


図11 休み時間の過ごし方

<考察>

休み時間を「特に仲のよい人たちと過ごす」割合が、学校段階が上がるにつれて減少し、「わりと多くの人と過ごす」割合は増加している。

その一方で、休み時間は、「一人だけで過ごすことが多い」と回答した高校生は11.5%であり、小・中学生より多く存在しており、普段一緒にいる友人の数が二極化している現状がうかがえる。

カ 学校回避感情の有無

Q 6 あなたは、病気でもないのに、普段、学校に行きにくい、または行きたくないと感じることはありますか。

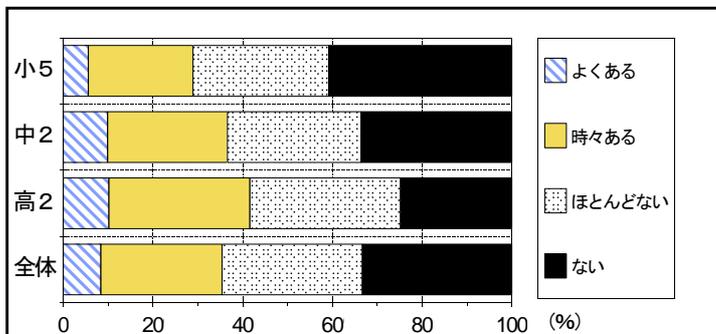


図12 学校回避感情の有無

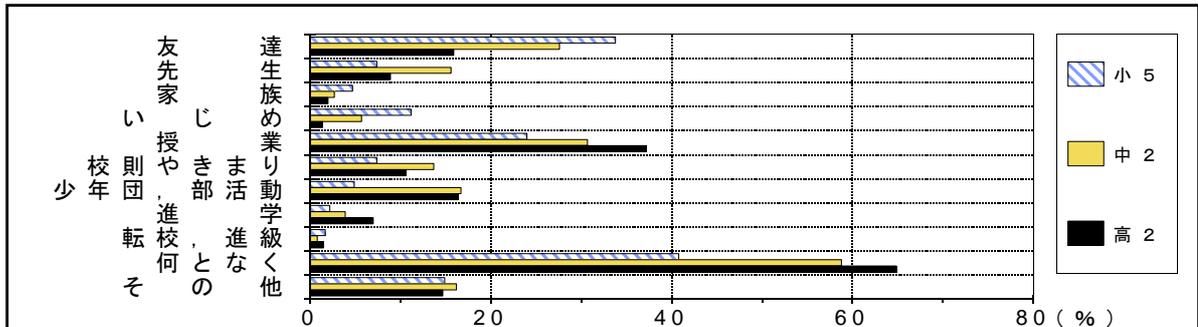
<考察>

学校回避感情が「よくある」、「時々ある」と回答した児童生徒は、小学校が28.9%、中学校が36.7%、高校が41.6%と学校段階が上がるにつれて増加している。

一方で、学校回避感情が「ほとんどない」、「ない」と回答した児童生徒は、全体で約65%おり、「学校に行きたくない」という感情より、「学校に行きたい」という感情が上回っていることが考えられる。

キ 学校に行きたくない理由

Q 7 6で「よくある」、「時々ある」と答えた人は、その理由を三つ以内で選んでください。



<考察>

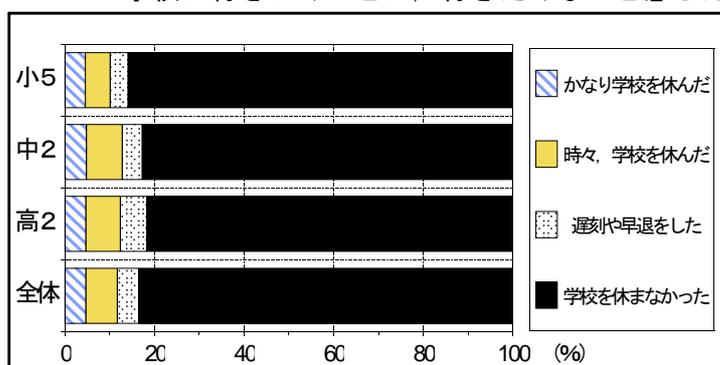
学校に行きたくない理由として、「何となく」がどの校種においても、最も多い理由として挙げられている。いじめや友達といった具体的な理由としてではなく、「何となく行きたくない」という学校へのネガティブな感情があることがうかがえる。回答しているのは、「学校に行きにくい、行きたくない」と思うことが「よくある」、「時々ある」の児童生徒であることを踏まえると、学校生活において、何らかのストレスが生じた際には、それを契機として「学校を休んでしまう」ことにつながってしまう可能性がある。

また、「その他」の理由としては、「だるい」、「きつい」、「眠い」といった身体症状を訴えるものが多く見られ、児童生徒にとって、行きたくない理由が明確ではないが、積極的に学校に行きたいという理由がもてずに、はっきりとしない不満を抱えていることが推察される。

次いで、「授業」と「友達」が挙げられている。「友達」は、学校満足感の高い理由としても挙げられているため、「学校が楽しいのは、友達がいるからである。」またその一方で、一度その関係がうまくいかないと「学校にも行きたくない」という理由の一つに変化することが考えられる。

ク 学校回避行動

Q8 学校に行きにくいとか、行きたくないと感じた時、あなたはどうしましたか。



<考察>

学校回避感情を抱きながらも、実際は、「学校を休まなかった」児童生徒が、どの校種にも81%以上いることが分かる。その意味で、未然防止の観点から、今、学校に来ている児童生徒への働き掛けが重要となる。一方で、「かなり学校を休んだ」と回答した児童生徒は約4.5%~4.8%おり、休み始めた際の初期対応を適切に行っていく必要性がうかがえる。

図14 学校回避行動

ケ 学校を休まないための対応

Q9 Q8で「かなり学校を休んだ」、「時々、学校を休んだ」と答えた人は、どうしてもらえたら休まずにすんだと思いますか。その理由を二つ以内で選んでください。

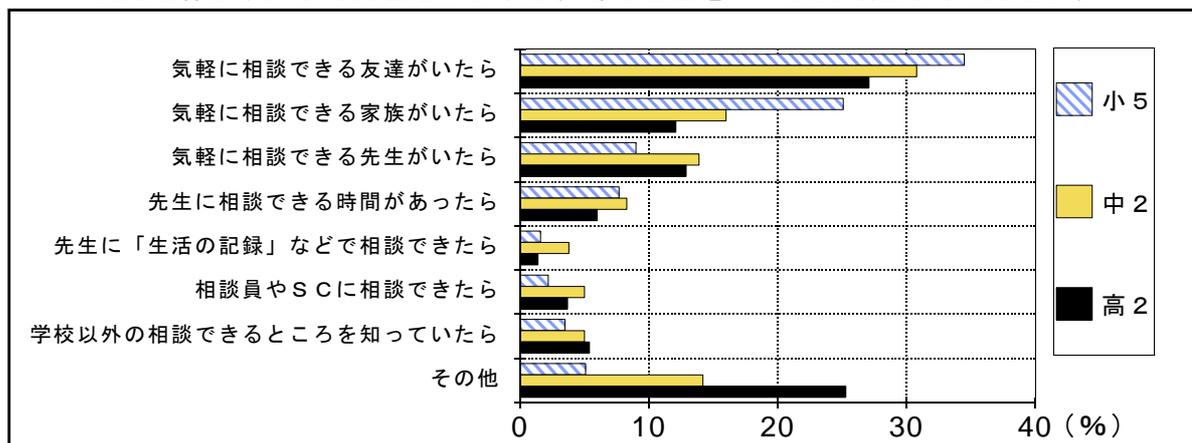


図15 学校を休まないための対応

<考察>

学校を休まないための対応として、「気軽に相談できる友達がいたら」と回答した児童生徒が最も多い。次いで「相談できる家族がいたら」、「相談できる先生がいたら」となる。学校を休まないためには、相談する時間や手段ではなく、誰に相談するかが重要であることが分かる。また、「その他」と回答している高校生の中には、「学校を休まないための対応」を「自分でも分からない」など、対処の方法について困っている状況や「宿題が終わったなら」、「朝、起きることができたら」など、通常の学校生活を過ごすための準備が十分、整えられていない状況も見られる。

コ 自己肯定感

Q10 あなたは、自分のことが好きですか。

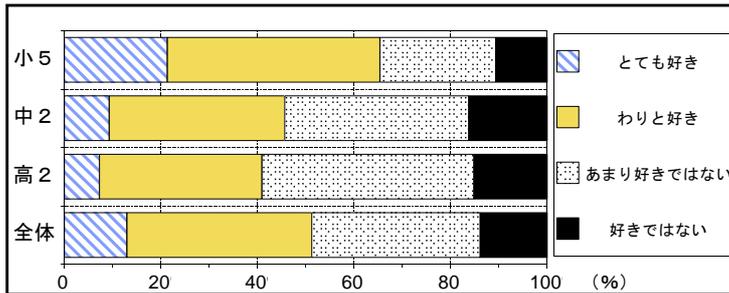


図16 自己肯定感

<考察>

自分のことが「とても好き」、「わりと好き」という自己肯定感の割合が、小学校で65.3%、中学校で45.6%、高校で40.9%と、学校段階が上がるごとに低くなっている。また、「あまり好きではない」、「好きではない」の占める割合が、全体で約48.8%であり、自分のよさを認め、自分のことを好きであるという自己肯定感をもちにくい状況がうかがえる。

サ 相談する相手

Q11 あなたにとって相談しやすい人はだれですか。

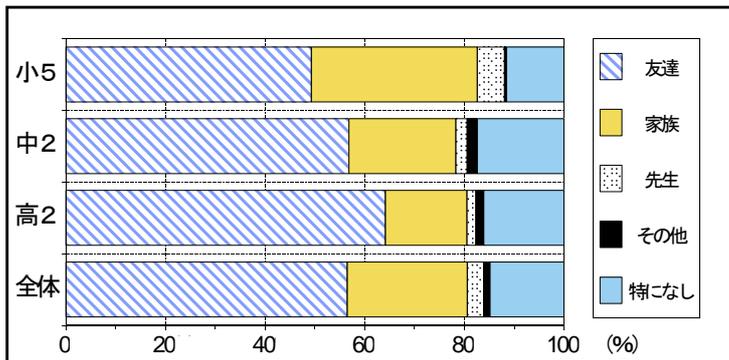


図17 相談する相手

<考察>

相談しやすい人として、「友達」、「家族」の順に回答している。学校段階が上がるにつれ、「友達」が増え、「家族」が減ってきている。一方、「先生」と回答している割合は低い。

また、相談しやすい人は、「特になし」と捉えている中学生・高校生は、約16%に当たり、生徒が学校、家庭、地域の中で、「相談したい」と思える環境づくりが重要であると言える。

シ 自己肯定感と学校回避感情

自己肯定感（自分が好き）と学校回避感情（病気でもないのに、普段、学校に行きにくい、行きたくない）の有無との関係を見る。

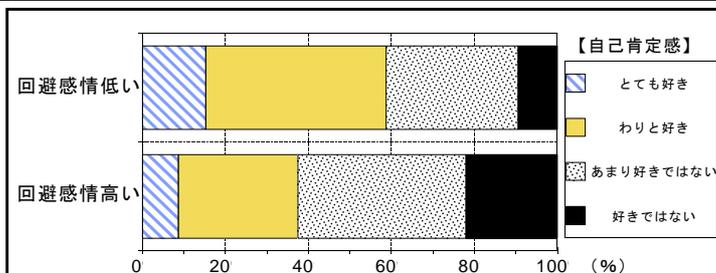


図18 自己肯定感と学校回避感情

<考察>

自己肯定感と学校回避感情をクロス集計すると、学校回避感情が高い児童生徒は、学校回避感情が低い児童生徒と比較し、自己肯定感が低いことが分かる。言い換えると、自己肯定感が高い児童生徒は、学校回避感情が低いことが分かる。児童生徒の自己肯定感を高めることで、不登校予防に効果を発揮する可能性がある。

ス 学級への所属感と学校回避感情

学級への所属感（今の学級の一員でよかった）と学校回避感情（病気でもないのに、普段、学校に行きにくい、行きたくない）の有無との関係を見る。

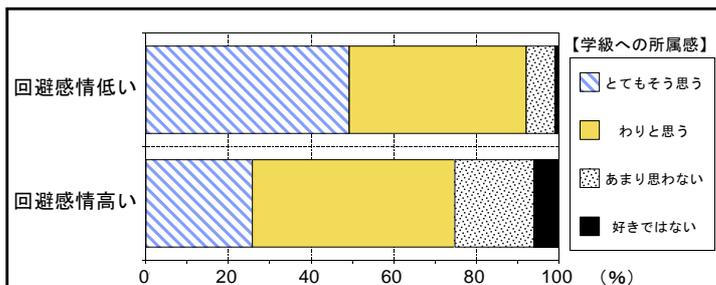


図19 学級への所属感と学校回避感情

<考察>

学級への所属感と学校回避感情をクロス集計すると、学校回避感情が高い児童生徒は、学校回避感情が低い児童生徒と比較し、学級への所属感が低いことが分かる。言い換えると、学級への所属感が高い児童生徒は、学校回避感情が低いことが分かる。学級への所属感を高めることで、不登校予防に効果を発揮する可能性がある。

セ 学級への所属感と自己肯定感

学級への所属感（今の学級の一員でよかった）の有無と自己肯定感（自分が好き）との関係を見る。

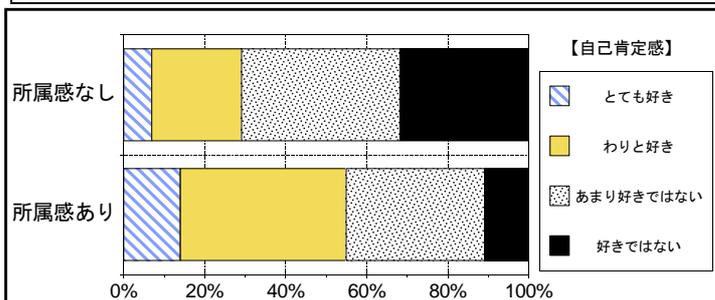


図20 学級への所属感と自己肯定感

<考察>

学級への所属感と自己肯定感をクロス集計すると、学級への所属感が高い児童生徒は、学級への所属感が低い児童生徒と比較し、自己肯定感が高いことが分かる。言い換えると、自己肯定感が低い児童生徒は、学級への所属感が低い。自己肯定感を高めるためにも、学級への所属感を高める働き掛けを行っていくことが有効と言える。

(3) 現状のまとめと課題

ア 現状のまとめ

(ア) 本県教員の不登校児童生徒への対応の実態について

教員は、不登校対応の課題として、特に「本人との関わり」、「保護者との関わり」、「校内支援体制の在り方」と捉えていることが分かった。また、不登校にならないための効果のある取組として、「保護者との関わり」を挙げ、「授業中の関わり」への意識が高くはないことが分かった。児童生徒が休み始める初期対応では、「電話をする」、「家庭訪問」が多く、長期化している不登校の児童生徒には、「部会等での話合い」や「関係機関との連携」において、継続して連携を取っている学校と連携を取っていない学校とに二極化している傾向がうかがえた。

(イ) 本県児童生徒の学校生活に関する実態について

学校への満足感や学級への所属感については、校種間の差はあまり見られず、概ね高いことが分かった。また、自己肯定感については、学校段階が上がるごとに低くなっており、自己肯定感をもちにくい状況がうかがえた。学校満足感の理由として、「友達」が挙がる一方、学校に行きたくない理由にも「友達」が挙がっており、友達との関係づくりが不登校の未然防止の一視点になることが分かった。さらに、学校を休まない対応として、児童生徒は、相談できる時間や手段よりも、相談できる相手が重要であると捉えていることが分かった。

(ウ) 学校回避感情と相関の高い「自己肯定感」と「学級への所属感」との関係について

自己肯定感が低い児童生徒と所属感が低い児童生徒は、学校回避感情が高くなるということが分かった。つまり、「自分のことが好きではない」児童生徒や「学級の一員でよかったと思わない」児童生徒は、学校に行きたくないという感情が高まることが分かった。

イ 課題

【課題1】 児童生徒の状態を捉え、自己肯定感や所属感を高める働き掛け

不登校の未然防止に努めるには、普段の学校生活における児童生徒の心情や考えを把握する児童生徒理解の在り方を「学校楽しいーと」等の活用を含め、更に検討する必要がある。また、得られた児童生徒理解の情報等を的確に把握し、児童生徒の自己肯定感や学級への所属感を高める働き掛けが重要となる。

【課題2】 校内支援体制の確立

児童生徒が休み始めた際や欠席が続く中で、学校内の支援体制を適切に構築し、チームとしてスピーディーに具体的に対応していくかが鍵となる。

【課題3】 学校と家庭(保護者)、相談機関等との連携

児童生徒が不登校になった場合に、学校が家庭(保護者)とどのような関わりをもつとよいのか、家庭訪問等を通してどんな連携を取っていけばよいのか、また、相談機関等、関係機関とどのような連携をしていくことが解決につながるのかを明らかにしていく必要がある。